東大ロースクールに進学
大学4年間の授業は皆勤

法学部　小山友太さん

「大学の授業は皆勤賞でした」というので、まずびっくり。「学費を払っている分は、大学で学ぼうという気持ちと、何より授業が好きだった」という。

在学中は、学内に設置されている多摩研究室、真法会研究室、いわゆる「炎の塔」で1年生の頃から勉学に励んだ。一方、授業は、法律科目だけに偏らないように一般教養科目も多く選択した。3、4年生のゼミでは、法学部のゼミの中でも定評のある中央大学法科大学院教授で弁護士の野村修也先生のゼミで学んだ。そして、春からは、東京大学法科大学院に進学する。将来は「アジアの途上国の法律をつくり、運用する法曹」を目指している。

「多摩研では、普段の大学生活では交流できない人々と切磋琢磨しながら学べる環境があり、真法会では、先輩との縦のつながりができ、将来像を描くことができました」と小山さん。日頃、交流していた先輩が、裁判官に進まれ、法曹を身近な存在に感じることができたという。

真法会の中には、法曹を目指さない人もいるそうだが、「法曹以外でやりたい道があるならば、その道を一生懸命頑張ればいい、という研究室の方針も良かった」と振り返る。学外の予備校には通うことはしなかった小山さんは、「多摩の奥地ではあるけど、中大の学習環境に感謝の気持ちでいっぱいです」と強調する。

2年生の秋から約1年間、真法会で学生代表も務めた。学生代表は、室員の学習状況や今後の方針などについて、研究室のOB・OGと協議するのが役割で、この経験を通して、「目上の人との話し方、手紙の書き方、座席の座り方などの基本的な礼儀を学んだ。弁護士や裁判官の先輩との交流を通して社会人としての基礎を学ぶことができました」という。

受験した法科大学院にはすべて合格したが、その中でも将来進みたい分野である国際面に強い東京大学法科大学院に進学することにした。「何でも構わないので、自分のやりたいことを必死でやることです」と、後輩たちには目的意識を持って、充実した大学生活にして欲しいとエールを送る。

読書もよくするというが、「読書は趣味ではありません」と自覚。ライフワークとして読書に勤しみ、その一方で社会を幅広くみるためにも、「お酒のノミニケーションも大事にしたい」と小山さんは笑った。

（梶原）

1年休学し、バックパックで南米巡る 焦らず、じっくり成長することを学ぶ

法学部 西澤雄一さん

リュック一つで旅をする、いわゆるバックパッキングは、時間はたっぷりあるけどお金がない学生ならではの旅のスタイルだ。西澤さんは、スペイン語を学ぶために3年生の時に1年間休学し、バックパッキングで南米各国を巡った。訪れたのは、エクアドル、ペルー、ボリビア、チリ、アルゼンチン、ウルグアイ、パラグアイなどの国々。いずれもスペイン語が公用語の国々だ。

「ガラパゴス諸島へ行ったり、ナスカの地上絵やマチュピチュなどの世界遺産を見たりもしました」という。旅先では様々な体験をし、見聞を広めることができた。長距離バスで移動中のバス車内で知り合い、仲良くなったボリビア人の家に泊めてもらったこともある。気ままな一人旅ならではの出会いだ。

ボリビアにある標高6088メートルのワイナポトシという山の登頂も経験した。「同じ宿に泊まっていた人たちに誘われた」のだという。山の中腹にある街から車で出発した後、トレッキングで標高5300メートルまで登り一泊。翌日、アイスクライミングで一気に山頂まで登った。登頂後の達成感を「『6088メートル』というトロフィーをもらった感じです」と表現してくれた。

まさに貧乏旅行だった。一日一食、パンだけで生活していた時期もあり、体重は50キロを切った。後に、地元の人に教わったジャグリングを路上で披露してお金を得るようになった。ジャグリングはかなりの収入になり、「宿代を払って一日三食たべてもまだお釣りがきました」という。

西澤さんは、「大学を休学して南米に長期旅行をする以上、その中で何かを得なければ」と必死になっていたという。しかし、自分より年上で、人生経験豊かなバックパッカーたちと出会い、話をするうちに「20年そこそこしか生きていない自分が未熟なのはあたり前だ」と感じるようになった。「旅の結果を急ぐのではなく、焦らずゆっくりと、時間を掛けて成長していければいいと思うようになりました」と語ってくれた。

授業でスペイン語を勉強していたこともあり、2年生の時にはメキシコへ留学した。しかし、3週間しか滞在しなかったこともあり、十分にスペイン語を学ぶことができなかった。帰国後、物足りなさを感じ、スペインへの交換留学生に立候補したが落選。それで本場でスペイン語を学びたいとの思いをさらに募らせた。その後、学部の先輩から南米のエクアドルにある語学学校を紹介され、「ヨーロッパに比べ物価が安い」ことなどもあって、南米行きを決意。エクアドルで2ヶ月間、ホームステイをしながら語学学校に通った後、安宿に泊まりながら各国を回った。

卒業後は、ゲーム会社で働く。「人を楽しませることをやりたい。エンターテイナーでいたい」と強調した。入社までの期間に、友達と会うため再び南米へと旅立った。（廣瀬）

NGO、FLPで精力的に体験学習
たどり着いたテーマは「食と農」

法学部　高松歩由さん

1年次の春休みに、高松さんは『特定非営利活動法人 地球の友と歩む会』のスタディツアーに参加するために、法学部のやる気応援奨学金を利用してインドへ渡った。

このツアーで高松さんは、NGOのスタッフが農村女性の自立支援や子どもの教育に携わっている現場を見学し、いろいろ考えさせられた。

「自分がこの現状に対して何をするべきか考えました。場当たり的な対処をしていくだけで本当に現地の人の役に立てているのだろうか。現地のことを何も分かっていない自分が役に立つのだろうか。そのときは考えても答えは見つかりませんでした」

答えを探るため、次に高松さんは、2年次からFLP国際協力プログラムで学ぶことにし、現役のJICA職員である鈴木洋一先生の社会開発ゼミを選んだ。

社会開発とは、経済的発展だけではなく、そこに暮らす人々の生活状況の改善やコミュニティー開発などを含む、包括的な開発のことである。高松さんは社会開発について学ぶうちに「日本の諸問題についても関心を持つようになった」という。

やる気応援奨学金、FLPに加え、学外の活動も精力的に行った。NGOのインターンとしてプロジェクト進行をモニタリングしたり、イベントに参加したりした。NGOの活動を通じて様々な人と出会い、「それぞれ異なった観点からの議論ができて面白かった。違った生き方をしてきた人たちとの交流は、とても良い刺激になりました」と話す。

そうした体験を通して、高松さんがたどり着いたのは「農業」だった。「食と農」という観点から、「環境問題や南北問題といった地球が直面している問題に関心を持ってもらえるような活動をする」ことを目標にするようになった。

様々な活動に精力的に取り組んだ結果、自分のやりたいことがはっきりと見えてきたのだ。4年間を振り返り、「大学時代はやりたいことをやれる唯一の自由な期間であると思います」と強調。「この4年間は自分の学びたいことを存分に追求できた時間でした。やる気応援奨学金もFLPもそれをサポートしてくれました」と全く悔いはない。

後輩たちに対しては、「ぜひ関心のあることに向かって、何かアクションを起こしてみてください。そうでないともったいないですから」とアドバイスしてくれた。

（駒田）

日中国際討論会で学術奨励賞を受賞
ゼミ代表として1年がかりで論文作成

経済学部　伊達翼さん

「大学生活は、ゼミでの活動が中心でした」という。所属したのは、長谷川聰哲教授の国際経済ゼミ。ゼミでは毎年、学術交流の一環として、中国の大学と英語で論文を発表しあう日中国際討論会に参加していて、伊達さんはゼミ代表として2008年の上海シンポジウムで学術奨励賞を受賞した。

2年生の時、北京で開かれた討論会に参加し、「東アジア構想体」について発表した伊達さんは、その時、中国の学生の優秀さに刺激を受け、「負けたくない。絶対追いついてやる」と決意。そして、3年生ではゼミの代表として、次の討論会に向けてほぼ1年がかりでの論文作成に邁進した。

その過程が凄まじい。3年次の後期は論文執筆に専念するため、ほとんど授業には出ず、取得単位はほぼゼロ。また、夏合宿からは論文を100本近く読み込んだ。さらに、ゼミの長谷川教授から「このままでは論文を出さない、まだ足りない」と言われ、大会1ヶ月前からは友人宅で合宿し、怠りなく準備したという。

この追い込みの時期には、「普段は楽観的な自分も、死にたいと思いましたね」と笑いながら当時を振り返る。そして、一昨年11月に上海で行われた討論会に全力で臨んだ結果、見事、学術奨励賞を受けることができた。

厳しいことで知られる長谷川教授から、「論文もメンバーも今までで一番良かった」と認めてもらえたのが何より嬉しかったという。

1年がかりでのゼミ活動をやり遂げて、「精神的に強くなった。それと人に頼ること、仲間と協力することを学びました」という。論文作成も初めは一人でできると思っていたが、徐々に人に任せ、信頼関係を結んでいった。

このゼミ活動の他にも、4年次にはインカレの就職活動支援団体を立ち上げたり、個人的にビジネスコンテストに参加したりと、とにかくアクティブに何事にも取り組んだ。

「自分で限界を作らないこと」というのが、伊達さんのモットー。理由は「限界を超えてこそ、成長できるからです」という。卒業までの残された学生時代を有効に使うため、春休み期間中には日本一周を一人旅した。その理由も「極限を体験したいから」と笑いながら話してくれた。

後輩達には、「自分のやりたいようにやればいい。やりたいと思っているなら、やらないと追いつかない」とアドバイス。今春からは、教育関連の企業に就職する。「日本の教育を良くしたい」という想いを胸に、社会へと踏み出していく。

（望月）

マスコミ志望で選んだ中大進学 テレビ局でFLPの体験活かす

経済学部　葛西友久さん

「高校生の頃からマスコミに興味がありました」という葛西さん。中央大学への進学を決めたのもFLPジャーナリズムプログラムの松野良一ゼミに入るためだった。希望通り中大に入学したが、すぐに思い通りの学生生活が始まったわけではなかった。

サークルに入ったものの馴染めなかった。「何かしなくては」という気持ちが募るが、なかなか見つからず、その気を紛らわすように週5日、アルバイトに精を出した。そんな生活も、目標にしていた松野ゼミに合格したことで変わっていった。

松野ゼミは、主に映像を作ることを通してジャーナリズムについて学ぶゼミだ。複数のプロジェクトがあり、そのひとつひとつを学生主体で運営している。葛西さんが最初に携わったのは「多摩探検隊」プロジェクト。「多摩探検隊」は多摩地域のケーブルテレビで放送されている10分間の番組で、企画・取材・編集などすべてを学生が行っている。

葛西さんは2年生のときに、ディレクターとして竹細工職人を取材し、番組を制作した。しかし、ここで、課題に直面する。「文字が書けないと、映像はできないんです。まず映像の構成を考えるんですけど、それがなかなか書けなくて…」。さらに「結局、自分は何を伝えたいのかわからなくなってしまった」という。

もうひとつ、葛西さんが関わったプロジェクトが「子ども放送局」だ。これは子どもたち自身が番組を作るというもので、ゼミ生はそのサポートをする。

3年生の夏休みに、福井県高浜町にある日引小学校の子どもたちと番組を制作した。内容は、2009年3月に廃校になる日引小学校のレポートだった。

1泊2日で、子どもたちに映像の作り方を教えて、撮影、編集し、上映会を行うというハードスケジュールだった。2日目に、保護者や町の人を集めて行われた上映会では、「映像を観て、保護者や町の人が涙を流したんです。自分の作ったもので感動を起こせるんだ、と思いました」。この経験がマスコミへの関心をさらに強くした。

3年生の秋からは、障害者ヘルパーのアルバイトを始めた。「兄が障害者なんですが、偏見とか差別は無関心だから生まれるんだと思うんです。無関心が関心に変われば、偏見、差別は無くなると思うんです」。ヘルパーをして、改めてそれを認識した葛西さんは、社会的課題に真正面から取り組めるマスコミの世界へ進む決意を固め、3年生の3月にテレビ局の内定を得て、希望がかなった。

4年生の夏休みに屋久島に行き、白門祭期間中には国立から仙台までヒッチハイクした。思い立ったら行動するタイプのようだが、「計画性が課題です」と笑った。（野崎）

視野を広げたフランス交換留学
自分の目で見る旅で、現実知る

商学部 周暁原さん

大学3年次の9月から4年次の6月まで、交換留学でフランスに留学した。入学当初はアメリカかイギリスへの留学を考えていたが、大学でせっかく勉強し始めたフランス語を試してみようと、フランスへの留学を決めたという。出発前のフランス語のレベルは「片言程度でしたね。本当にボンジュールくらいしか話せませんでした」というから一大決心だったに違いない。

留学先はマルセイユ大学の応用経済学部。「日本の経済学の授業に比べ、より実践的な内容だった」という。フランス語での授業には、「内容が日本で学んでいたことが多かったので、なんとかついていけました」と屈託がない。

現地では留学生で固まるのを嫌い、「フランス人しかいない授業を進んで取った」というから何事にもアグレッシブだ。

「フランス人と組んでメディア経済学のプレゼンテーションをしたのをよく覚えています。準備は大変でしたが、とてもいい経験になりました。半年くらい経つとフランス語もすらすら出てくるようになっていました」

勉強に積極的に取り組むとともに、世界各国の学生と触れ合ったことで、「視野が広がった」と強調する。「レバノンの友達は、『学校が戦争でよく休学になる』と言っていました。アフリカの友達は、『兵役が終わってから学校に来た』と話していました。戦争はまだまだ過去のものではないと感じました」と厳しい国際情勢についても学んだ。

「日本で普通に暮らしていたら、こうした学生と触れ合う機会はまずないので、このような話を聞くこともなかったでしょう」と述懐する。

この留学経験を踏まえて周さんは、「学生はもっと旅をするべきです」と強調する。「老若男女さまざまな人に会って見識を広めることができました。例えばヨーロッパは一見すると華やかなイメージがありますが、案外、質素な部分も多かったです。実際に行ってみて初めて分かることがたくさんあります」と旅の効能を説き、「何でも自分の目で、見てほしいです」と声を強めた。

周さんは今春、中央大学大学院の商学研究科に進学し、保険のルーツである海上保険について研究する。留学から帰国後、海上保険に関する勉強会に参加するうちに、もっと勉強したいという気持ちが起こったそうだ。将来も海上保険に携わる仕事を希望している。

周さんには夢がある。数年後、留学先で出会った友人3人とそれぞれの夢を叶えて南フランスで再会することだ。留学で一生涯の友を得た周さんは、再会を楽しみに、これからもチャレンジ精神で夢路をたどる。

（駒田）

経理研で毎日夜遅くまで勉強
3年次に公認会計士試験に合格

商学部　佐竹篤さん

「中央大学を志望したときに、経理研究所があるのを知って、それで公認会計士を目指してみようと思いました」。もともと資格に興味があった佐竹さんは、入学時から公認会計士試験にむけて勉強を始めた。

公認会計士は、弁護士などと並ぶ国家資格であり、短答式試験と論文式試験の2つの試験がある。佐竹さんは、2年生のときに短答式試験に、3年生で論文式試験に見事合格した。

「1年生の頃は自宅で、2年生からは開門時間の朝8時から閉門時間の夜の11時まで、毎日学校に来て勉強しました」という。炎の塔の中にある経理研究所は、簿記検定試験・公認会計士試験のサポートをしており、その研究室でもっぱら勉強した。

毎日、長時間の勉強にも、「ルーティン化した生活をしていたので、あまりストレスは感じませんでした」とさほど苦にならなかったそうだ。勉強をはじめた当初は、「公認会計士の仕事をよく知らなかった」と話す。「それが勉強していくうちに会計のこととかビジネスのことがわかってきて、勉強が楽しかった」という。明確な目標を定め、それに立ち向かっていたからだろう。

「経理研では、ほぼ毎週答案練習があって、自分の順位が出るので、その試験結果に後押しされました。それと周りに強い志を持った仲間もいたので、他の関心事をシャットアウトして勉強に専念できました。本当にありがたい環境にありました」

佐竹さんは、資格試験の勉強には「勉強時間の確保、情報の収集、モチベーションの維持の3つが大切」と教えてくれた。「予備校も利用しました。通信で勉強するので、DVDを見て、早送りしたり、何度も見返したりできるので便利だった」という。

結果、3年生で試験に合格し、早々に監査法人から内定を得た。

「2年半勉強して、大学生活の残りの1年半は自由に過ごせました。読書をしたり、趣味の時間も持てたりしました」。大学生活を振り返って、「充実していた」と話す。

4月からは、あずさ監査法人で、主に外資系金融機関を対象にした部署で働く。海外で活躍したいという希望があり、「英語ができないと、やりたい仕事ができない場合もでてくる」ので、今は英語の勉強にも励んでいる。

最後に、公認会計士試験を目指す後輩達に「勉強に時間をかけたら、かけただけの結果がついてくるので、コツコツ勉強できる人であれば大丈夫です」とアドバイスをくれた。

（武田）

商学部論文大会のプレゼンで優勝
途上国への郵便貯金制度導入を論ず

商学部　塚本悟史さん

『発展途上国における郵便貯金制度導入について』をテーマに卒業論文を書いた。それを商学部演習論文大会でプレゼンテーションしたら、見事、商学部長賞を受賞した。

プレゼンの経験はそれまでにもあった。3年生のとき、学内プレゼンテーションにゼミのチームで出場し、地域金融機関について発表した。それがきっかけで、途上国で広まっているマイクロファイナンスに関心を持つようになった、という。

「マイクロファイナンス」とは？と聞くと、「『マイクロ』というのは、極小、最も小さいという意味。だから『マイクロファイナンス』とは、小さい額を取り扱う金融ということです。自営業者や零細企業のほかに、信用がない個人や一般家庭にも担保無しでお金を貸したりします」と、明確な答えが返ってきた。

つまり「マイクロファイナンス」とは、低所得者層向けの小口金融サービスである。

塚本さんは、研究を進めるうちに、「マイクロファイナンスは一時的な貧困解決にはなるけれど、根本的な解決にはならない」と考えるようになり、根本的な貧困解決のために郵便貯金制度の導入を思いつく。

「貧困解決には、産業発展が必要だけれど、そのためには機械などに投資するお金が必要になる。現状ではそのお金がない。お金を集めるためには郵便貯金制度が役に立つと考えました」

根本的な貧困の解決方法である郵便貯金制度と、一時的な貧困の解決方法であるマイクロファイナンス機関が提携し、相互に補い合って国家の発展、貧困解決を目指すべき、というのが卒業論文の論旨だ。

プレゼンテーションについては、3年間、塾の講師のアルバイトをしていたため、「人前で説明することに抵抗はない」という。

論文をまとめることについても、「自分の考えを形にしていくのは面白いし、そのために勉強しなければいけないので、自分の成長にもなる」と能動的に考えている。「自分の考えを発表することで、人が認めてくれたり、それによって何かが変われば意義のあることだと思う」。こう話す塚本さんは、4年生の夏にも外部の懸賞論文に応募した。

「政策提案や制度づくりにかかわりたい」ということで、卒業後は、日本医師会の事務局で仕事をする。「医者や医学生の友達と話をしたり、医師会に興味を持って勉強するうちに、医者の労働環境や医者不足をはじめとした問題に興味をもつようになりました」という。

公務員の勉強もしていた塚本さんだが、公務員は通常、数年ごとに異動があるため、それよりは「医療という一つの分野に集中していける日本医師会の事務局で、経験を蓄積し、専門性を高めたい」と考え、医療のスペシャリストを目指すことにした。卒業後を見据え、「日本の医療をよくしたい」と決意を新たにしている。

（武田）

フランス交換留学で体得した自主性
目的持って行動する大切さに気づく

文学部　三田詩子さん

昨年8月から昨年7月まで1年間、休学してフランスへ交換留学した。「フランスに行ってから、よく話すようになった、元気になったね、って周りから言われます」と照れくさそうに笑う。フランス留学は、大学生活のなかで自分を大きく変えた1年になった。

交換留学を決意した理由は二つ。「フランスの文化がどのようなものなのか見てみたかった」というのが、一つ目の理由だ。フランス文化に関心を持ったのは、ジャグリングが好きで中学3年のときに3ヶ月間、当時スペインに本部があった平和を訴える『子どもサーカス』に参加したときだった。

この子どもサーカスは「ベンポスタ子ども共和国」といって、「強い者は下に、弱い者は上に、子どもはてっぺんに」という理念を掲げ、子どもによる自治を実現させた生活共同体である。その時、フランスに動物を使わずに人間だけで表現する現代サーカスがある話を聞いて、「そのようなサーカスが生まれるフランスは、一体どんな文化なのだろうと思った」という。

そんな疑問を抱きながら臨んだフランス留学では、「フランスには国立のサーカス学校があったりして、しっかり芸術に対して政府が援助しているんです」と日本との違いを感じた。また、交換留学先のリヨン第二大学には、アート・マネジメント・コースがあって、ピエロの練習をする授業があり、「自国の芸術を大学の授業内で実践的に教えるフランスは、芸術を大事にする文化が根付いている」という答えに行き着いた。

学生の積極的な姿勢にも刺激を受けた。「日本では先生が前に立って大勢に向かって講義し、それを生徒が座って聞くという授業が多いと思うんです。でも、留学先では生徒が主体でした。自分たちが動かなければ進まないんです」と話す。

また、「フランス人は自己主張が強い。だけど、日本人は対立をできるだけ避けようとして主張しない」と指摘され、「その通りだなと思った」こともあった。こうした留学体験を通して、「何事も自主的に行動する」ことを体得した。

留学を決めた二つ目の理由は、「フランス語の習得を大学での勉強の目的にしていた」からだった。目的をはっきり持ったことで、「現実的に具体的に考えてみるようになったと思う」と話す。そこで感じたのは、出会いの大切さだった。

「1年間留学をしようと思った時に、実際に経験した人に聞いてまわったんです。人とのつながりを広げてみたことで、たくさんの良いアドバイスをもらえたので、人とのかかわりが大事なんだということに気づきました」と振り返る。

卒業後は塾講師として働く。「働きながら勉強をして幼稚園教諭の資格をとりたい。そして青年海外協力隊として中東に行きたい」と三田さんはすでに次の目標を定めている。

（野村）

相撲部に所属し、教員免許を取得
『故郷で教師になる』の夢を実現

文学部　鎌谷健太郎さん

4年間、相撲部で練習に精進し、傍ら勉強にも精を出して教員免許を取得した。故郷の愛媛県で教師になり、相撲を指導するという中学生の時から抱いていた夢を実現するためだ。「お世話になった人に恩返しをしたいと思って、教員免許を取りました」という鎌谷健太郎さんは、文武両道で夢を引き寄せた。

相撲が盛んな愛媛県松山市出身。小学校3年生の時、体格が良いからと相撲部に勧誘された。相撲に興味はなかったが、「ためしに一試合だけ出てほしい。続けるか、続けないかはその後決めたらいいから」と先生に言われ、県大会に出場。その結果、団体では優勝、個人ではベスト8に入った。

しかし、個人戦で優勝できなかった悔しさが残った。「勝つまでは辞められない」と相撲を続けていくことを決心した。小・中・高校と相撲部の主将を務め、練習に励んだ。

中央大学に進学したいと思ったのは、高校生の時、愛媛県宇和島市で行われた全国大会で中大の活躍を見たのがきっかけだった。「中大は、他大に比べてチームワークが抜群によかった」と自分自身の判断で決めた。

中央大学進学後は、文武両道を心掛けた。ずっと応援してくれていた父親から「下積み時代の1、2年生の時こそ勉強しておかないと、大事な3、4年生の時期に相撲に専念できなくなるぞ」と言われ、忠実に実行した。相撲部の方針が学業優先で、練習も夕方からという環境もあった。

中大相撲部では会計・主務を担当し、東日本学生相撲連盟の副幹事長も務めた。そこで体験したいろいろな人との出会いから、「周りの人達の支えがあるからこそ、自分たちは相撲ができるのだと実感しました」という。そうした中で、中学生の時から抱いていた「故郷で教師になりたい」という夢が膨らんでいった。

「今まで支えてくれた人達に恩返しをしたい。教師になりたいという気持ちが強くなりました。中大相撲部のハイレベルな環境の中で相撲ができることは、将来の自分の財産になると思い頑張りました」

鎌谷さんは4月から愛媛県松山市に帰り、まず講師からスタートする。「教師になったら、勉強を教えることはもちろん、相撲を通して礼儀作法はじめ挨拶、感謝の気持ちを生徒たちに伝えたい」と語る鎌谷さんの挑戦は続く。

（橋本あ）

私立高校の教員採用試験に合格
4年生春からの必死の勉強が実る

文学部 仁科伸康さん

「教師になる」と決めた4年生の春休みから勉学に励んだ結果、学部生の合格は難しいといわれる私立高校の教員採用試験に見事合格した。国文学を専攻し、「大学の授業は楽しかった」と語る仁科さんは、今春から私立高で国語を教える教師になる。

「国語や歴史には、高校の頃から興味があった」という仁科さん。大学1年の国語学概論の授業では、「知らない世界がたくさんあることにショックを受けた」と話し、「例えば…」と前置きし、「『ん』には発音の種類が複数あるんです。『神』という字を『しん』と読む4つの言葉『神官(しんかん)』『神秘(しんぴ)』『神道(しんとう)』『鬼神(きしん)』は、それぞれ『ん』を発音するときの舌の位置が異なります」と解説してくれた。

これを授業で聞いたとき、「『ん』はひとつだけという常識が打ち砕かれ、新しい世界が開けてくる感覚に魅了されました」という。それを機に、仁科さんは学習意欲を増していった。

大学3年次には静岡の山奥を訪ね、方言について調査した。4年次には往来物といわれる平安貴族の手紙に興味を持ち、研究を進めた。教科書の中の知識に留めず、「自分でやらなきゃと思った」という。

勉学が中心となった仁科さんの大学の時間割りには、教職も取っていたため、2時限から5時限まで立て続けに授業を受ける曜日もあった。2年次の1年間で80単位を取得したほどだ。3年生になり進路を選択するときには、「教師になるか大学院に進むかで悩んだ」という。そこで仁科さんは、「人と触れ合うのが好きだから」という理由で、教師の道を選んだ。

最終的に教師になることを決意したのは4年生の春だった。周囲の人が3年生の秋から勉強を始めるのに対して、仁科さんは比較的遅いスタートになったが、将来の道を定めたのちは必死になって教員採用試験の勉強に取り組んだ。

「『私は教師になる』と決めた時から、毎日を真摯に過ごした」と話す。そんな仁科さんの持論は「まじめな生き方が最後には勝つ」だ。私立高校を選んだのは、「学びを追求して建立された私立高校の『建学の精神』と、人としての生き方を学ぶ『人間形成』を重視する校風に共感した」からという。

「人間形成ができてこその学力」と強調する仁科さん。後輩たちに対しては、「一度自分が決めた道に向けて、真摯に毎日を過ごすこと。そうすれば自然とやるべきことは見えてくる」とメッセージを送ってくれた。

(山岸)

中学生で志した法曹の道へ
多様な問題解決の道学ぶ

総合政策学部　千野真希さん

春から上智大学法科大学院既修コースに進学する。法曹を目指すようになったのは、中学生の時だった。喧嘩や暴力で荒れた学校の状況を目の当たりにして、「社会の中で守られるべき人、普通に暮らす人々の権利が守られていない。その解決のためには、法律の力が必要と感じた」という。

「法律を問題解決の道具として使いたい」と考えた千野さんは、その前提として、視野を広げ、いろいろな分野を理解する力をつけることが必要と考え、大学進学では、法学部ではなくより幅広い分野を学べる総合政策学部を選んだ。

入学後は、初心を貫いて総合政策学部でありながら郁法会研究室に所属し、法律の勉強に取り組むとともに、視野を広げるため、「大学の授業に全力で取り組んだ」という。3年次には、行政法の阿部泰隆教授のゼミに入り、約6万字に及ぶ卒業論文にも懸命に取り組んだ。

しかし、法律の勉強だけにとらわれず、周りの友人らが取り組んでいた、学内の就職ガイダンスにも足を運んだ。「同じ年代の他の人たちが、どのようなことをしているのか、自分の目で見ておくことが必要と感じた」からだ。

「総合政策学部では、法律以外にも、経済の視点など、多様な問題解決のアプローチを学ぶことができました」と振り返る。

少人数教育に重点を置いている総合政策学部では、教員のオフィスが学部棟内にあるため、「教授との距離が近く、オープンな雰囲気も総合政策学部の魅力の一つです」と話す。そして、「中大だけが学外の予備校などを利用する必要のない学習環境が整っていると思う」と語る。

後輩たちには、「興味をもったら、なんでも一生懸命学ぶこと。やりたいことがはっきり決まっていなくても、一生懸命やったことは必ず自分の軸足になります」とエールを送る。

最後に、「社会には、いろいろな考え方を持った人がいる。法律家になった時に、相談に来られた方の立場に立ち、その人のバックグラウンドをよく理解したうえで、要求に応えられるようになりたい」と抱負を語った。

（梶原）

目指すは2年後のロンドン五輪出場
ケガきっかけに水泳スタイル変える

総合政策学部　原田蘭丸さん

昨年（2009年）夏、イタリアで開かれた世界選手権の日本代表に選ばれ、4×100Mフリーリレー、4×100Mメドレーリレーに出場した。競泳フリースタイルの日本のホープで、2012年のロンドン・オリンピック出場を目指している。

中央大学での競泳生活は、決して順風ではなかった。入学後の2年間は、原田さんにとって初めての大きな試練だった。「大学1年の冬に捻挫をして、じん帯を切ってしまったんです」。これをきっかけに、それまでのようにただ全力で泳ぐだけでは、記録が出ず、勝てなくなってしまったのだ。

その後も大会には出るものの、「レースではいつも最後の方だった」という。軽い練習にもついていけなくなり、「この頃は軽いうつ状態だった」と振り返る。そんな状態は大学2年の冬まで続いた。

「このままではいけない」と監督とコーチと長時間話し合い、次の日から徹底的に技術重視の練習を始めた。「もう一度、本気で水泳をやってみよう」と、力任せの泳ぎからテクニック重視の泳ぎに切り替えたのだという。その甲斐あって3、4年生では結果が出はじめ、3年生の時には中大のインカレ優勝に貢献することができた。

水泳をはじめたのは、4歳の時。2歳上のお姉さんに影響されて、「面白そうだったから」と自らやりたいと親に頼んだ。スイミングスクールに通い、週6日、1日1時間半の練習を続けた結果、10歳の時にジュニア・オリンピックカップで全国優勝した。

その後、毎年賞をとるほど強くなった。「ただ全力でやったら勝てたという感じです」。8歳の1年間では、タイムが10秒も短縮した。

高校は地元の千葉を離れ、東京の日大豊山高校に進学し、寮生活を始めた。中学まではスイミングスクールで練習していたので、「学校でチームメイトと一緒に水泳がしてみたかった」からだ。しかし、インターハイ優勝を目指せるほど強いチームではなく、個人として頑張ることに意識が向いてしまっていたという。

中央大学への進学を考え始めたのは、高校2年の頃。当時、中大はインカレ11連覇という勢いにあった。有名選手を数多く輩出している水泳の強豪大学であり、水泳に取り組むにはベストの大学だと、両親と相談して決めた。

「チームで過ごした大学4年間は、本当に楽しかったです」と原田さん。だが、競泳人生はまだこれからだ。「個人で大きな記録を残せるまで水泳を続けていきたい」と語るように、卒業後は自衛隊体育学校でロンドン・オリンピックを目指す。中央大学にはなかった屋内長水路（50m）プールで毎日練習できる環境が大きな魅力だという。

「水泳で1番をとりたいんです」と語るその目は、とても輝いていた。

（石川）

ピアニストと数学の研究者を目指す
院進学で、両方に「100%取り組む」

理工学部 戸田容平さん

第19回日本クラシック音楽コンクール最高位はじめ、2つの国際コンクールと3つの国内コンクールで最高位の成績を収めている。高校2年からはソロリサイタルを毎年開催している。

数々の受賞歴を見れば、当然将来はピアニスト、と思われるが、「ピアニストはもちろんですが、数学の研究者も考えています。大学に入学してから数学の面白さに惹かれたのです」と戸田さん。

4歳からピアノを始めた。中学ではバレーボールの強豪校に入学し、毎日バレーの練習に明け暮れ、全国大会で2位になった。この頃は「ピアノはあくまで趣味程度」だったという。

高校は男子校だったため、合唱の伴奏など人前で演奏する機会がなく、師事している先生から「このままピアノをやめてしまうのでは」と心配されて、ソロリサイタルを誘われた。この頃から徐々に練習に熱が入っていった。

高校2年の夏に初のソロリサイタルを開催。その翌日渡ったアメリカでマンハッタン音楽院の教授に素質を認められ、「将来はピアニストになりなさい」と言われた。「この時、ピアニストになることを決心しました」という。

それからというもの、ピアノにのめり込み、猛練習をした。この年の冬に再度訪れたアメリカで、同じ教授の前で演奏した時には「前回とは別人」と驚嘆された。「あの頃はピアノ中心の生活でした」と振り返る。

高校卒業後は、音大でなくともピアノは続けられるとの思いから一般大学を受験。中大理工学部は、「練習時間の確保のためと、自宅からの近さ」で選んだ。数学科にしたのも、「物理や化学と違って実験による時間の拘束が少ないだろう」と思ったからだった。

大学に入学してからは、ピアノと同じくらいに数学にとりつかれた。「大学に入って数学をきちんと学び始め、興味を深めていく中で、特に代数学の面白さに惹かれていきました」。

代数学とは数学の一分野だ。「代数学は教科書一行を解釈するにも、ノート1ページ分の証明が必要なこともある。その難解さにやりがいがある」と目を輝かせる。その表情は、ピアノを語る時と変わらない。

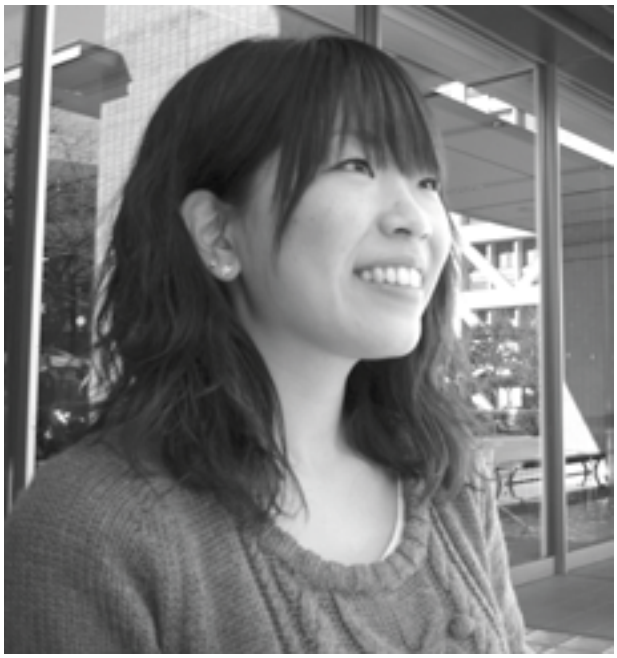
聞けば現代音楽の作曲には、グラフやコンピュータなど数学が大きく応用され、数学科の教授陣にも熱心な音楽愛好家が多いという。

卒業後は中央大学大学院に進学する。院進学に迷いはなく、「ピアノと数学の両方に100%の力で取り組みたい」と力強く語る。現在もピアノの練習は1日も欠かさない。学業との両立でおくる今の生活は、「ピアニストと数学の研究者」という特異な目標へ向けた毎日だ。

（小室）

チャレンジ精神旺盛な行動力
大学院で精密機械工学を専攻

理工学部　木村加奈子さん



「大学時代のたくさんの時間を無駄にしないように心掛けました」と自身が言うように、機敏に行動する人だ。興味のアンテナが四方八方に向いている。話を聞いていて、何度もそう感じた。

「ボランティア活動がしたかった」と高校時代に一度体験した老人ホームでのボランティアを思い出し、募集を探した。しかし、見つからない。そこで、通学途中に老人ホームがあることに気づき、募集されていないにも関わらず、飛び込んだ。「思い立ったらすぐでした」と笑顔で言う。

施設の職員にも歓迎され、食事の配膳だけでなく高齢者とのよもやま話も数多く経験した。「なかでも戦争中や戦後の体験談は重く、非常に勉強になりました。常に何事にも『させて頂く』という気持ちで、得るものが沢山あった」と振り返った。

サークル活動では、軽音楽部に所属。高校生から始めたギターを続け、1年生からライブハウスでのライブも行った。1回のライブへ向けて1カ月の間に4～5回の練習。バンドメンバーは演奏する曲に合わせて毎回変わるのだという。

「他大生も含めて、この音楽活動を通じて様々な人と出会いました。驚きだったのは、ライブで知り合った他大学の学生と、4年生になってから研究活動の場でばったり再会したんです」

木村さんの専攻は「精密機械工学」。この学科の女子学生はわずか5％足らず。「高校生のころから家電量販店へ行くのが好きで、商品を見ているうちに自分も作りたいという気持ちになって」この学科を選んだという。

大学ではさらに興味が深まり、「学部の授業だけでは中途半端、もっと多く学びたい」と大学院進学を決めた。このころから、理工系女子学生のキャリアアップを支援する理工学部応援プログラム『WISE』へ参加。現役女性研究者の講演や、先輩の理系女子学生ならではの就活体験を聞いたり、東芝、IBMなどに会社訪問した。開発現場の見学だけでなく、結婚し、家事、子育てを両立しながら研究者として働く女性と話し、「将来のことを聞けて参考になった」という。

大学院進学については、「父は賛成だったが、母は不安に思っていた」という。「母は女性として就職が遅れることを心配していたんです」。何とか説得し、進学を決心した。これを機にアルバイトをする意識が変わったと語る。

「親に負担をかけたくない、自分が働いたお金でできる限り学費を賄いたい」と考え、働く時間を増やした。「今後時間ができたら、ボランティアを再開したい。海外にも行きたいんです」と木村さんにはこれからも無駄な時間はない。

（小室）

挫折教訓に練習重ね、結果につなぐ
目指すはJ2からJ1リーガー

法学部 村田翔さん

日本プロサッカーリーグのJ2、水戸ホーリーホックで、今春からプロサッカー選手として歩み出す。「普通に会社に入ったら、楯突いてクビになるタイプ。サッカーができなかったらやばかった」と冗談交じりに話す。自分自身のフィールドはサッカーの他にはないと自覚、プロとして人生をかけた勝負に挑む。

「挫折だらけでした」。プロサッカー選手としての正式契約と初の練習を数週間後に控えた村田さんは、こう言ってこれまでのサッカー人生を振り返った。「でも挫折した方がいいと思っている。信じてるいというか」。上を目指すには苦節の時が必ずある、ということがわかっているというのだ。

「いつからボールを蹴っていたかはわからない」という村田さん。遊び半分でボールを蹴っていたことから離れ、サッカーの練習を本格的に始めたのは小学生3年生からだった。「小学生の頃は自分が一番うまいんじゃないか、と思っていた」。しかし、持ち前のサッカーの才能が通じたのは小学校までで、中学1年から所属したプロのサッカー選手を育成するクラブチームには、「うまいやつがゴロゴロいた。普通にやっていたら負けるな」と思い、練習に真剣に取り組むようになった。

週6日の午後6時から8時までの練習の後にも、プロを目指す仲間と自主練習に取り組んだ。そうして15歳のときには日本代表に選ばれるほどの実力を身に付けた。

「結果は出すものじゃない。結果はついてくるものだ」と練習の積み重ねが成果につながることを学んだ。

しかし、その後順調にサッカー人生を歩んできたわけではない。高校時代は3年生の大事な時期に不調に陥り、中央大学に入ってからも1、2年生の間は、自分の満足のいくプレーができなかったという。

しかし、どんなに不調の時でも「練習メニューは変えなかった」。結果を急いで、成果が見えやすい練習に取り組むよりも、「自分を信じていつもの練習に取り組み続けることが上達への近道だということを経験しているから」という。何度も挫折を乗り越えてきたことで、会得した手法だ。

サッカー部主将を務めた村田さん。チームメイトからは、力強いリーダーシップを認められ、「どんな辛い時でも平然とし、常に強気でいる」とあつい信任を得た。不調に耐え抜いたからこそ芯の強さが身についたのだろう。

「激しくサッカーに人生をかければ、絶対上に行ける」。目指すはJ1リーガーだ。

（山岸）

人一倍の練習量で自立心培う
愛されるプロサッカー選手に

商学部 小野博信さん

「小野ちゃんがプロになれなくて、誰がプロになれるんだ、っていうくらい練習していた」。小野さんの努力家ぶりを、こう紹介するのは、サッカー部の同僚で主将を務めた村田翔さん。二人は、今春からともにJ2の水戸ホーリーホックに所属し、プロサッカー選手の道に入る。

小野さんはGK(ゴールキーパー)。MF(ミッドフィルダー)の村田さんとはポジションは違うが、「プロでも同じチームでやれるのは、ものすごく心強い」と話す。

「サッカー選手として自分自身に正面から向き合い、自立心をもって練習に励んだ。チームメイトを大切にし、みんなからフィールドに立つことが認められる選手になれるように心がけた」。サッカー漬けだった大学生活を小野さんは、こう振り返る。

高校はサッカー強豪校として全国的に有名な山梨県立韮崎高校。だが、高校3年次には、県大会で思わぬ敗退を喫し、目標にしていた全国高校サッカー選手権大会に進むことができなかった。その悔しさは「大学入学後もひきずっていた」という。

大学入学後1年から試合に出場し、ゴールを守ったが、大学2年次にはチームが連敗していった。自身の不調が重なり、試合のメンバーにも選ばれなくなってしまい、悩む時期が続いた。それまでは、ただ「試合に出ていればいいや」と軽く考えていた小野さんだったが、その時に「練習しなくちゃだめだ」と自分自身の甘さを痛感した。

これを機に練習に臨む姿勢がかわった。自主練習では、課題を克服するための練習メニューをこなした。GK専門コーチがいないため、自分自身が監督・コーチとなり、試行錯誤を重ねながら、ひとつひとつの練習にこだわって取り組んだ。

自主練習の量はチームの中で一番多かった。ランニングや筋力トレーニング、ボールを使ったメニューなど、5時間の練習をこなした。これに全体練習が加わった。黙々と練習に励む小野さんの姿は、同じ志を持つチームメイトの刺激となった。

一方、「私生活で適当なことをすると、プレーに影響する」と日常生活にも気をつけた。疲労を回復させるため、きちんと休息時間をとり、食事メニューにも気を配った。

「頑張っているか。人としてだらしない姿をみせていないか。寝る前に自分自身に問いかける日もある。プレーできる人数は1チーム11人だけで、試合に出られない人もたくさんいる。精一杯責任あるプレーをしなければ、申し訳ない」

やわらかな笑顔と誠実な口調が印象的な小野さん。「サッカー選手は体を使って感動を与えられる仕事。ファンを大切にし、みんなに愛される選手でありたい」と話す。人としての成長を、サッカー人生の飛躍にかける小野さんの活躍が待ち遠しい。

(山岸)

インディアンスとマイナー契約
中大初のメジャーリーガー目指す
法学部 中村尚史さん

大リーグ・インディアンスの背番号「1」のユニフォームに袖を通し、ちょっぴりはにかんだ。いよいよメジャーへの挑戦がはじまる。ルーキーリーグからのスタートで、1A、2A、3Aとメジャー昇格への道のりは高く、険しいが、「3年間はがむしゃらに頑張る」と試練は覚悟のうえだ。

身長195センチ、体重90キロ。日本人離れした長身から角度のある最速149キロの直球や変化球を投げ込む大型右腕。東都大学リーグで挙げたのは、わずか1勝だが、イ軍が注目したのはそのスケールの大きさと潜在能力の高さだ。

昨年5月、春のリーグ戦のとき、インディアンスのスカウトから誘われた。もともとプロ志望で、「本当かな。すげぇな。やった」と驚きながらも、素直に嬉しかったという。秋のドラフト会議で日本のプロ球団から指名されなかったため、「一度しかない人生、悔いの残らないようにしたい」とメジャー挑戦を決めた。

「もちろん不安や、迷いもあった」というが、元巨人軍投手の高橋善正監督からは、「やってみろ」と後押しされた。両親からも「ガンバレ」と力づけられた。

中村さんは東京・品川出身で、野球を始めたのは小学1年生。初めからポジションは投手で、小6の時にはすでに身長183センチあった。中学では軟式野球部で投手。硬式になった高校1年の秋の都大会にエースで臨み、ベスト16に入った。

「それまでは大学やプロで野球ができるとは思っていなかった。都のベスト16まで進んだことで大学から声がかかるようになりました」

ただ、高校時代は素質がかわれていたものの故障がちで、中大野球部にはセレクションを受けて、入った。入部してからは野球漬けの毎日で、「高校では週3日しか練習がなかったので、大学の練習はきつく感じた」という。他の選手との力の差を知り、「他人より多く練習をしなければ…」と自らを鼓舞した。

大学4年間を振り返り、「挫折感があります」という。試合で投げられない時もあった。3年の夏のオープン戦では調子が上がらず、「どうすればいいかわからない。野球がつらい」とチームメイトに相談した。「来年は4年。もうひと花咲かせよう」と励まされて、「泣きまくった」というが、それで思いは吹っ切れた。

ルーキーリーグはほとんどの選手が中南米出身で、スペイン語が主流。言葉も分からず、生活習慣も違うので、「不安はある。でも、大丈夫です。練習後にチームメイトと飲みに行けば…」と笑い、いまは「日本に帰るつもりはありません」と挑戦を楽しむ気持ちになっている。好きな言葉は「継続は力なり」。その言葉を胸に刻み、中村さんは3月6日、中大初のメジャーリーガー誕生の期待を背に、勇躍、アメリカへ発った。

（望月）

卓球男子複で24年ぶりの学生日本一に
主将としての重責・重圧も体験する

文学部　森田侑樹さん

昨年10月上旬、横浜文化体育館で行われた第76回全日本学生卓球選手権大会で、森田さんはペアを組む瀬山辰男さん（経3）と男子ダブルスの決勝に勝ち上がった。準々決勝で、優勝候補の水谷隼選手、甲斐義和選手の明大ペアを下し、勢いに乗っていた。

決勝の相手はやはり明大ペア。3ゲーム先取の試合で第1セットを取ったが、第2、第3セットは連取され、追い込まれた第4セットはマッチポイントを握られた。だが、デュースを繰り返した末、見事逆転でセットを取ることができた。森田さんは、この勝利を「4年間の集大成が出た。人生が変わった瞬間だった」と振り返る。第5セットも競り合いながらも、勝利し、見事優勝を果たした。中大にとって24年ぶりの快挙だった。

その勢いで森田さんは、今年1月の全日本卓球選手権大会では男子ダブルス3位という結果も残した。中大の選手が全日本で表彰台に上がったのは40年ぶりだ。

卓球は中学校の部活で始めた。担任の先生が卓球部の顧問で、入部を勧められたのがきっかけだった。「卓球の世界では中学から始めるというのは遅すぎるんです」という。でも熱心な両親の応援、協力もあって、毎日休み無く練習し続け、メキメキ上達していった。中学卒業の頃にはシングルスで石川県大会優勝、北信越大会優勝、全国大会でベスト8に入る結果を残した。しかし、全国大会前日、常に支え続けてくれた母親が亡くなった。当時を振り返って、「辛い経験を決意に変え、卓球への熱意がさらに強まりました」と語る。

高校は、卓球名門校の東山高校（京都）に入学を決めた。「地元の高校でも良かったのですが、強い選手達の中に身を置くことによって全国で勝てる選手になりたかった」という。

高校では2年次にインターハイ男子ダブルスでベスト8、3年次には近畿大会でシングルス、ダブルス、団体で優勝し、三冠を飾った。インターハイは中国人選手に破れ、良い成績は残せなかった。

「高校時代はやり残した気持ちがあった」という森田さんは、その思い晴らすため中央大学に入学。1年生で、関東学生新人選手権大会のシングルスで優勝し、すぐに結果を出した。その後も1年生で全日本学生選手権大会の男子ダブルス3位、2年生では全日本学生選抜卓球選手権大会でシングルス4位、3年生では同大会シングルス2位など好成績を収めた。

3年生の秋、卓球部主将になった森田さんは「それまでは自分のことだけ考えていればよかったが、他のメンバーが勝つにはどうしたらよいか、周りに中大は強いと思わせたい」と思うようになった。しかし、これがプレッシャーとなってプレイに影響が出たこともあり、「自分の弱さだった」と自戒する。

卒業後は実業団のシチズン時計で競技を続けていく。次の目標は「社会人日本一」だ。（堀）